

BLEAK HOUSE に漂う霧の内側

——ディケンズの心——

力 丸 晃

1.

Bleak House はその名の通り、全編を通じて暗く陰鬱な物語である。有名な最初の霧 (fog) の部分はその物語の姿を見事に予感させる。そして青木雄造が言わずとも「霧は、やがてもやとなり、雨となり、みぞれとなって、全巻を重苦しい雰囲気に取り囲み、むしろまかれたイギリスの病患を象徴する」¹⁾のである。すなわち、ディケンズが問題にしようとしている多くのテーマは全て霧に覆われている。その霧を少しずつ取り去るのは我々読者の役割である。

Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river, where it rolls defiled among the tiers of shipping and the waterside pollutions of a great (and dirty) city. Fog on the Essex marshes, fog on the Kentish heights. Fog creeping into the cabooses of collier-brigs, fog lying out on the yards, and hovering in the rigging of great ships; fog drooping on the gunwales of barges and small boats. (中略)

The raw afternoon is rawest, and the dense fog is densest, and the muddy streets are muddiest, (p. 5)²⁾

彼の風刺のセンスは素晴らしい。人々が目を背ける物の中にこそ目を向

けなければならないことを彼の風刺が暴いていく。ディケンズの目は常に小さなことにしっかりと向けられる。そこには見逃してはならない重要なメッセージが隠されていることを知っているからだ。Mr. Smallweed は劇画の主人公だ。Mr. Turveydrop は礼儀作法の中に全身が埋もれて身動きできない。

物事の現象を対照させてみていく彼のセンスもまた素晴らしい。その両極端をディケンズの巧みな描写力が浮き彫りにさせる³⁾。上流階級を象徴する Chesney Wold と最下層階級を象徴する Tom-All-Alone's の組み合わせしかり、誤った慈善行為の象徴として Mrs. Jellyby が登場し、駄目を押すようにして Mrs. Pardiggle が登場する。最下層の完全な理解者として Allan が登場し、更に Esther が登場する。社会におしつぶされようとする Jo という子供がいるかと思えば、Mr. Skimpole という大人でありながら子供であるふりをしてそれを武器とする人物を配する。Esther が語りかける人形はどんなメッセージを持っているのだろうか。煉瓦職人の妻が抱く赤ん坊は、妻にとっては人形のような存在なのだろうか。赤ん坊は生きているのだろうか、死んでいるのだろうか。

ディケンズは教師としても素晴らしいセンスを発揮する。小説の中では Mr. Jarndyce にその教師の役割を与え、生徒としての Esther Summerson を登場させる。この2人を配置することによってディケンズは私達読者に最下層階級の人々との付き合い方を教授する。Old Bleak House は学校としての体裁が十分ではないが、New Bleak House はまさに福祉学校としての基礎が確立している。

ディケンズはこの陰惨な物語にコミカルな描写を与えることによって人の死から深刻さを軽減させ、彼がちりばめた情報を霧の下から取り出すことによって複雑に絡まった糸を解きほぐす気力を読者に与えてくれる。まさに J. Hillis Miller が述べているようにこの本は膨大な書類の山そのものである⁴⁾。その書類の山に隠されている絡まった糸を解きほぐす鍵は、細かい描写で提供されるディケンズの天才的な観察眼だ。

Chancery がらみで Bleak House があり、かつ Tom-All-Alone's が存在

する。この2つはディケンズが悩み抜いた末に重大な謎を解く鍵を隠した場所である。だからこそ彼はこの小説の命名に苦慮することになる。1度入り込むと2度とそこから逃げ出すことが出来ないような不気味さが漂う場所なのだ。この2つの名前の間をディケンズは一人でさまよう。厳密に言うと Bleak House にたどり着くのは最後の最後だ⁵⁾。まるでこの物語の最後の場面で、Esther が New Bleak House に無事に入り込むことを予感させているかのようだ。それは本当の慈善(愛)⁶⁾の勝利に満ちた至福の時でもある。

2.

Bleak House での Miss Esther Summerson はまるで金太郎飴だ。どこを切ってみても彼女は無欲で、気品があり、献身的で、優しい。時にはそれは度を超えて表現される。彼女が小説に登場する最初のころは慈善の意味を良く理解できてはいない。彼女はただ単に周囲の全ての人の隣人でありたいというだけなのだ。彼女の第1時間目の収穫は Mrs. Jellyby に代表される慈善事業に関する情報だ。しかしそれもまだ Bleak House への最初の訪問のための準備段階に過ぎない。ディケンズは Mr. Kenge の口を通して Mrs. Jellyby を次のように紹介する。

who devotes herself entirely to the public. She has devoted herself to an extensive variety of public subjects, at various times, and is at present (until something else attracts her) devoted to the subject of Africa. (p. 35)

Mrs. Jellyby は確かに典型的な慈善事業家ではある。慈善を施すことによって自分はアフリカの人々のかけがえのない隣人であると豪語する。家中をアフリカからの手紙が埋め尽くす。可愛想に娘の Caddy は母の秘書としての役割を余儀なくされている。その指にはインクが染み込み、その顔

はインクに染められている。身につけている服たるや悲惨そのものだ。(I suppose nobody ever was in such a state of ink. (中略) she really seemed to have no article of dress upon her, from a pin upwards, that was in its proper condition or its right place. p. 38)

弟の Peepy が頭をうって激しく泣いていても Esther と Mr. Guppy が弟の面倒を見なければならぬほどの状態だ。弟以外はその家には誰もいないのかと思えるほどだ。客室までもが他の部屋と変わらず乱雑そのままの状況だ。Mrs. Jellyby の心の中には厚い霧の壁がある。僅かな霧の隙間からアフリカがぼんやりと見えている。ところが自分の家も、家族も見ることができないほどの濃霧が心を覆う。だから自分の国の最もひどい状態を見抜くことができない。彼女の夫が破産をしても彼女にとっては大した問題とはならない。哀れな Mr. Jellyby は無口だ。その無口な彼が Caddy に珍しく話しかける。Esther は Mr. Jellyby がそんなにもたくさん話すのを聞いたことがないと驚く。

“My dear Caddy!” said Mr. Jellyby, looking slowly round from the wall. It was the first time, I think, I ever heard him say three words together.

(中略)

“What do you wish me not to have? Don’t have what, dear Pa?” asked Caddy, coaxing him, with her arms round his neck.

“Never have a Mission, my dear child” (pp. 373-374)

Caddy は母親の Mrs. Jellyby に Prince Turveydrop との結婚の許しを乞う。母親が許す口調は実に軽い。「代わりの男の子を雇ってるから心配いらぬわよ。そんなことより、仕事の邪魔しないで(I have engaged a boy, and there is no more to be said. (中略) don’t delay me in my work, but let me clear off this heavy batch of papers before the afternoon post comes in!” p. 297)」とさもたいした問題ではないといった風情なのだ。

Mrs. Jellyby は自分の国にいながら外国人のような存在であると同じように、自分の家庭においても全くの部外者的存在に過ぎない。

もう一人の問題のある慈善事業家に Mrs. Pardiggle がいる。彼女がしていることはただただ動き回ることだけだ。(the people who did a little and made a great deal of noise; p. 93) 彼女は自分の子供達を自慢にしている。しかしその子供達は Esther の霧のかかかっていない目から見るとかなりひどい状態におかれている。Mrs. Pardiggle の心もまた厚い霧に覆われているのだ。貧しいレンガ職人の家について行ったときに、Esther はこの慈善事業家の正体を知ることになる。

Mrs. Pardiggle accordingly rose, and made little vortex in the confined room from which the pipe itself very narrowly escaped taking one of her young family in each hand, and telling the others to follow closely, and expressing her hope that the brickmaker and all his house would be improved when she saw them next, she then proceed to another cottage. I hope it is not unkind in me to say that she certainly did make, in this, as in everything else, a show that was not conciliatory, of doing charity by whole sale, and of dealing in it to a large extent. (p. 100)

家から一歩外に出た途端に Mrs. Pardiggle の盲目の状態つまりその分厚く霧に覆われた心の状態が明らかにされる。Esther と Ada とが見付けた赤ん坊がほっておかれたために死んでしまっていることにも気付かないほどである。Mrs. Pardiggle は Mrs. Jellyby と比べればいくらかは(肉体的距離は)最下層の人々に近い存在ではある。問題は、自分こそはそういった人々の本当の隣人であって、他の人全てはその資格がないと思込んでいることにある。心の視野が狭い人は決して慈善(愛)を必要としている人々の隣人にはなり得ない。ディケンズの風刺の力が十分発揮される場面である。自国の民を忘れ、見も知らない人々のことにしか関心を持って

ない Mrs. Jellyby や Mrs. Pardiggle を通して私達読者は慈善事業の大切な側面に目を向けざるを得なくなる。2人の慈善事業家が活発に活躍している同じ時に、Jo という少年は死に瀕しているのである。

Jo is brought in. He is not one of Mrs. Pardiggle's Tackahoope Indians; he is not one of Mrs. Jellyby's lambs, being wholly unconnected with Borrioboola-Gha; he is not softened by distance and unfamiliarity; he is not a genuine foreign-grown savage; he is the ordinary home-made article. Dirty, ugly, disagreeable to all the senses, in body a common creature of the common streets, only in soul a heathen. Homely filthy begrimes him, homely parasites devour him, homely sores are in him, homely rags are on him: native ignorance, the growth of English soil and climate, sinks his immortal nature lower than the geasts that perish. (p. 564)

Jo こそが100%の慈善を受けるべき対象人物ではなかったか。彼こそが Tom-All-Alone's を代表する人物ではなかったか。Tom-All-Alone's を色で表せば黒だ。通りは荒廃しきっていて、崩れそうな家々には浮浪者が満ちあふれ、ちゃんとした人々は寄り付かない。(…is a black, dilapidated street, avoided by all decent people; where the crazy houses were seized upon, when their decay was far advanced, by some bold vagrants, p. 197) Jo はどこへ行ってもそこに長く留まることが出来ない。彼は常に「移動 (move on)」しなければならない。慈善の象徴である Bleak House で Charley や Esther に介護されている時ですら彼はそこに留まることが出来ない。彼は自分が恐れている Bucket 刑事に追い払われてしまう。Jo 1人だけにとどまらない。多くの Jo が隣人を求めている。その叫びに耳を貸す者は少ない。人々の関心事は己のことだけだ。宗教すら何の力も持たない。宗教家 Chadband は Jo に向かって説教する。

“And do you cool yourself in that stream now, my young friend?
No. Why do you not cool yourself in that stream now? Because
you are in a state of darkness, because you are in a state of
obscurity, because you are in a state of sinfulness, because you are
in a state of bondage. My young friend, what is bondage? Let us,
in a spirit of love, inquire.” (p. 243)

ディケンズが読者に伝えたかったのは、宗教家 Chadband 自身が、Jo に
関して彼自身が述べている状態にどっぷりと浸かっているということなの
だ。心が真っ暗であれば宗教という眼鏡を通してすら大切なものを見落と
すと言いたいのである。たとえ見えたとしてもその目には膜がかかっている
のだ。霧に覆われているのだ。宗教そのものが抱えている偽善の側面、
それは囚われた状態 (in a state of bondage) なのだ。慈善 (愛) が持つ
べき自由の精神を失っているのだ。本当は何をすべきかということが見え
なくなっているのだ。宗教の実態は慈善 (愛) とは正反対にあると言える
のだ。でなければ宗教家 Chadband は、いくら凍てつく寒い日であったにし
ても Esther に冷たい別れのキスをする妻 (When she gave me one cold
parting kiss upon my forehead, like a thaw-drop from the stone porch—
it was a very frosty day—I felt so miserable and self-reproachful, p. 23)
と結婚しなかったのではないか。

Mr. Snagsby の使用人である Guster がほんのちょっぴり優しくしただ
けで Jo の心は休まる。ほんのちょっとした優しさだ。ところがその行為に
は宗教家 Chadband の説教よりも遥かに大きな力がある。Jo は決して説教
には耳を傾けない。彼は足を引きずりながら階下へ降りて行く。そこには
優しい Guster がいる。Jo の肩を親しげに軽くたたき Guster。彼女に説教
の言葉はない。彼女に出来ることは彼のために心から泣くことだ。それは
Jo が両親のことを何も知らないと話してくれたからだ。彼女が泣くことが
出来たのは彼女自身も同じ境遇にあったからだ。2人は同じ感情を共有し
ていたことになる。だからこそ Guster が肩をたたいた時に Jo の内面は感

動に満たされたのだ。ディケンズが私達読者に求めている慈善（愛）の姿がここに具現されているのである。

But down-stairs is the charitable Guster, holding by the hand-rail of the kitchen stairs, and warding off a fit, as yet doubtfully, the own supper of bread and cheese to hand to Jo; with whom she ventures to interchange a word or so, for the first time.

“Here’s something to eat, poor boy,” says Guster.

“Thank’ee, mum,” says Jo.

“Are you hungry?”

“Jist!” says Jo.

“What’s gone of your father and your mother, eh?”

Jo stops in the middle of a bite, and looks petrified. For this orphan charge of the Christian saint whose shrine was at Tooting, has patted him on the shoulder; and it is the first time in his life that any decent hand has been so laid upon him.

“I never know’d nothink about ’em,” says Jo. (p. 323)

Lady Dedlock と Jo との距離はあまりにもかけ離れている。どんなに女中のような恰好に変装してみても彼女は身分を隠すことは出来ない。彼女の仕草は身についたものである。Jo はそのことに気が付いている。Guster と比べるだけでも明らかだ。Lady Dedlock は異なる環境への身の処し方を知らない。Guster は汚い身なりの Jo を前にしても何のためらいもない。だから Guster が肩をたたいてくれた時に Jo は安らぎを得、Lady Dedlock が与えてくれたお金は後にトラブルの元になる。彼女は地位も名誉もあるが人生に対して確たる目的がない。その結果ふらふら旅を続けるが得る物は何もない。彼女こそ十分に慈善を施すことが出来る立場にいるが、charity（慈善）という言葉すら知らないかのようだ。Tom-All-Along’s では彼女はよそ者に過ぎない。従って彼女と Jo とは同じ地域にいるにもか

かわらず2人の歯車が合うことはない。彼女がその場所で死んでも Tom-All-Alone's の住人は誰一人として彼女のことににかかわりあわない。

3.

Break House の登場人物の中でも慈善(愛)という意味では Esther が隣人としてかかわらなくてもいい人々が存在する。その一人に Mr. Skimpole という人物がいる。彼は責任感がなく他人に頼りっぱなしだ。自分は純真で子供のようにだと自己紹介する。(“You know what a child I am. Why surprised?” —中略— “You know I don’t pretend to be responsible. I never could do it. Responsibility is a thing that has always been above me—or below me,” p. 727) Mr. Skimpole は絵に描かれた小鳥だ。その子供らしさも模造品だ⁷⁾。Mr. Skimpole はお金に対して無関心だというわりには何の躊躇もなく賄賂を受け取る。Mr. Vholes を Richard に紹介するだけで5ポンドをせしめたのだ。借金が元で逮捕された時にも Esther と Richard が同情して Mr. Skimpole に代わって罰金を支払う。Mr. Jarn-dyce は彼に2度と金を渡すなど忠告しなければならないほどだ。彼に対する慈善行為は意味をなさない。彼には才能がある。プロの音楽家なのだ。詩人でもある。彼はただ努力をしたくないだけなのだ。Mr. Skimpole が死んでから彼の日記が出版され素晴らしい読み物としての評価を得る。彼は作家としても財をなすだけの才能を持ち合わせていたのだ。人に頼らず人を助けることさえ出来たはずだ。この Skimpole という人物は Chesney Wold の住人 Sir Leicester Dedlock と同じ側面を持っている。品のあるなかなかの好紳士であるにもかかわらず Sir Leicester Dedlock には慈善(愛)の心が無い。招かれざる客だった Volumnia のような貧しい従兄弟達を歓待はするがその心は慈善とはほど遠い。怠け者のために金を使っただけのことだ。Skimpole が形を変えて出現しただけなのだ。Sir Leicester Dedlock の本当の姿は選挙の票を得るために賄賂も辞さないほど醜く利己的である。その金を彼はどのようにして手に入れたのだろうか。その名

前にたがわず最後には行き詰まって (deadlock) しまう。

Old Mr. Turveydrop は Sir Dedlock の生まれ変わりだろうか。彼は行儀作法 (deportment) の達人だ。彼の立ち居振る舞いは行儀そのものであるがその実態はというと偽りにまみれている。入れ歯からかつらに至るまで彼自身のものは何もない。(He was a fat old gentleman with a false complexion, false teeth, false whiskers, and a wig. p. 171) 衣服の内に潜むものも全て偽りからなっている。そのため、若いのか老人なのかすら見分けがつかないほどだ。それもこれも全て行儀作法の模範になるためである。(he was not like youth, he was not like age, he was not like anything in the world but a model of Deportment. p. 171) 彼の姿は偽りそのものだ。彼は収入を得るために何をするわけでもなく、ただ自分の振る舞いを作法通りにするだけなのだ。Sir Dedlock も実質には収入を得るためには何もしない。ディケンズが暴きたかったのはその点だ。貴族の生活ぶりは Old Mr. Turveydrop のそれと何ら変わるところはない。

息子の Prince Turveydrop がいる限りこの行儀作法の達人に生活の不安はない。だから彼は社交界に姿を表すことが出来るのだ。そうせずにはいられないのだ。(he had found it necessary to frequent all public places of fashionable and lounging resort; p. 173) 息子から Caddy と結婚すると報告された時に俄かには賛同出来なかったのもそのためだ。しかし彼の言葉は作法にのっとりしたものだ。口ではもっともらしいことを言いながら、同居することを条件にしてはばからない。("My son and daughter, your happiness shall be my care. I will watch over you. You shall always live with me" pp. 293~4) 息子が独立すれば作法の達人は収入の道を失うことになる。貴族社会の崩壊にもつながる大事件というわけだ。Sir Leicester Dedlock は Chesney Wold を離れなければならなくなるのだ。Old Mr. Turveydrop が作法の範を示すことが出来る限りは貴族社会の存続は保証されているのも同然なのだ。慈善という観点から考えれば貴族はその在り方を変えなければならない。Sir Dedlock は自分の従兄弟に対してではなく Jo や Jenny や Liz のような心底からの貧しい人々に目を向け

なければならなくなるのだ。

4.

ディケンズは更に中流階級に目を向ける。中流階級の人々はよく働く。Mr. Smallweedはその典型的な人物だ。彼の手にかかると彼に金を借りた人々はひとたまりもない。彼はケチン坊だ。だから自分の孫が友人 Guppy の払いで夕食を取ることになったと知って喜ぶ。彼の心の中を占めているのはただただ金のことだけだ。そのみが彼の人生の楽しみなのだ。自分が死ぬ時に1銭の金も持って行くことが出来ないということを知らないかのように振る舞う。彼は金をため込むが使うためではなくため込むことが第一目的なのだ。貧しい人のために使うなどもってのほかだ。

Mr. SmallweedはGeorgeやBagnetに借金返済延期を申し込まれるが待つ気など毛頭ない。金に関しては厳しい。金の問題となると決して待とうとはしない。妻の兄弟のMr. Krookが自然発火が元で焼死した時も、老人は次の日の早朝にでかけて行き妻の名の元にMr. Krookの財産の所有権を主張するのである。Mr. Krook存命中はそこに足など運んだことすらない。そんなことなどすっかり忘れてしまったかのようだ。肉体は弱り衰えてはいるが、こと金のこととなるとその行動力は素早い。金への執着の極みはMr. Krookの部屋から遺書が発見された場面でクライマックスに達する。部屋中ひっかきまわし、書類の山を掘り起こして詮索し、故人が残した宝の山に不自由な体で飛び込むさま (rummaging and searching, digging, delving, and diving among the treasures of the late lamented. p. 491) は、まさに滑稽の極みでさえある。

見付けた書類の一枚にJarndyceの署名を見つけるや、Mr. Smallweedは早速Bleak Houseへと赴く。彼の貪欲と強欲とは凄まじい勢いで行動する。彼がBleak Houseに現れた時の出立ちたるや交通事故で担ぎ込まれた被害者のそれだ。(in a black skull-cap, unable to walk, who is carried up by a couple of bearers, and deposited in the room near the door. p.

736)

Mr. Krook の事務所から掘り当てたラブレターをてこに Sir Dedlock をゆすることなど朝飯前だ。彼の辞書には人に対する思いやりなどという言葉はない。ディケンズの風刺の矢面に立たされるはずだ。ディケンズは Smallweed 家の人々が文字どおり雑草のように伸び放題でいて欲しくないのだ。同情と憐憫の情を持って最下層階級の人々の隣人となって社会に光を当てて欲しいと願っているのだ。

ディケンズの矛先は大法廷の組織にまで向けられる。その動かし難い組織のせいで、本来ならば幸せな生活を送ることが出来るはずの人生が破滅に向かわされているという現実を目を向ける。

ディケンズは大法廷に入り浸りの人物を通してその問題を明らかにする。Miss Flite だ。またもう一人の犠牲者、Shropshire 出身の男だ。2人は Miss Flite が飼っている小鳥のような存在だ。Mr. Krook の店の猫が食ってしまおうといつも虎視眈々と狙っている。一旦鳥かごから出ようものならあっという間にその猫の餌食になってしまう。

おかしくなってしまった Gridley ですら慈善家としての素養を持ち合わせている。心に霧がかかっているなければ誰でもそうなれるのだ。Gridley はしばしば役人 (sheriff's officer) の家に出掛けて行く。その3人の子供達の面倒を見るためだ。彼は腹を立てることが多いが、Charley の兄弟である Tom は Gridley を怖がることはない。隣人同志なのだ。お互い心を理解し合える仲なのだ。実は、Gridley 自身が他人の助けを必要としている。しかしディケンズはこの人物を通して、誰でも助けを必要としている人の隣人になれると読者に説いているのである。みんながみんなの隣人になりさえすればこれら3人の子供達ですら生き続けるのは難しくない。確かに Guster の肩をたたき優しさや、Gridley の援助はたいしたものではないが、私達読者にこの上もない幸せを運んでくれる。

大法廷の犠牲者の中に Richard Carstone なる者がいる。ディケンズが創り出した典型例となる。Richard は法廷が自分に有利な判決を出してくれるのを期待する。裁判は遅々として進行しない。その結果彼は人生の目

標を失う。Mr. Jarndyce に医者になることを勧められると「実はそう思っていたところなんです (That's the thing, sir!)」と目を輝かせて言う。しかし Esther は半信半疑だ。結果は Esther の思った通りになる。Richard は後に決心を変えて Kenge and Carboy の会社に勤めることになる。更に後には軍隊へと流れ流れて行くがそれもうまく行かない。そうこうするうちに大法廷の判決によって Richard は全財産を失う。彼の弁護士 Mr. Wholes が Richard に対してすることは手数料を要求することだけだ。彼の目的は裁判を長引かせることだ。彼は悪名高い弁護士なのだ。彼を Richard に紹介したのは例の Mr. Skimpole だ。2 人の間には金銭取引がある。Ada の夫である Richard は日を追う毎に貧しさを増していく。Richard にとっての救いは少なくとも最後には Jarndyce and Jarndyce 事件の結審を見ることが出来たことだ。Mr. Smallweed が Mr. Krook の店のがらくたの中から見付けた遺書は法廷を動かすほどの物ではないことが証明されるのである。結果として Richard は全ての物を失ったことになる。このことによって Richard の心の目は覚まされる。Ada と Mr. Jarndyce に許しを乞う Richard。

“I have done you many wrongs, my own. I have fallen like a poor stray shadow on your way, I have married you to poverty and trouble, I have scattered your means to the winds. You will forgive me all this, my Ada, before I begin the world?” (p. 763)

再出発するには遅すぎるきらいがある。Mr. Jarndyce はそんな状況にある Richard に「雲が姿を消したぞ。もう我々の目をさえぎるものはないんだ。 (“the clouds have cleared away, and it is bright now. We can see now.” p. 762)」と言って励ます。しかし既に病に犯された身体には先の判決のショックから立ち直る余力が残されていない。大法廷の裁判の遅さゆえに、若くして死んで行く一人の犠牲者がここにいる、と言うわけだ。永くたれ込めていた霧が晴れたというのに、Richard は自分の子供の顔を見

ることさえ出来ない。

5.

Miss Esther Summersonにとって Bleak House は多くのことを学ぶ学校のようなものだ。彼女は全ての人の隣人として生れついているとも言える。慈善（愛）のためならば彼女は活動的だ。自分のことを考える暇がないほどだ。

Esther はしばしば Jenny や Liz を訪問する。Richard の将来を思って悩む。誰かから悩みの相談をされると自分のことのように一緒になって悩む。Mr. Skimpole の所に出掛けて行っては少しの躊躇はするものの Richard から手を引かせようとする。Caddy が Turveydrop の息子と結婚すると聞くと、結婚の準備を手伝う。女中の Charley の病気が重くなったと知ると、伝染することも厭わずに看病をせずにはおれないのが Esther なのだ。彼女は自分が何者かを自問することはしない。名親 (godmother) の Miss Barbary が「お前は生まれて来なかった方がはるかに良かったの。お前の母親は恥っさらしだよ。 (“It would have been far better, little Esther, that you had had no birthday; that you had never been born!” —中略— “Your mother, Esther, is your disgrace, p. 19) 」と言った言葉が彼女にはこたえていたのかもしれない。

Esther は実に素晴らしく心の優しい娘である。彼女は Miss Barbary によって自分自身の秘密を知ったことで本当の意味での慈善（愛）の精神を持つ隣人に成り得たのだ。Mr. Allan Woodcourt のお陰で Esther は自分自身に目を向けることができたのである。天然痘の後遺症で悩む Esther に鏡を見るように勧めたのは Allan だ。鏡の中の Esther の本当の美しさを教えたのは Allan なのだ。

“My dear Dame Durden,” said Allan, drawing my arm through his, “do you ever look in the glass?”

“You know I do; you see me do it.”

“And don't you know that you are prettier than you ever were?”

I did not know that; I am not certain that I know it now. But I know that my dearest little pets are very pretty, and that my darling is very beautiful, and that my husband is very handsome, and that my guardian has the brightest and most benevolent face that ever was seen; and that they can very well do without much beauty in me (p. 770)

John R. Reed はディケンズがこの物語の隅から隅までキリスト教に根を張り巡らせて書きあげたと主張する。彼によれば Mr. Jarndyce が救世主として描かれていることになる。Reed の思い込みは強烈だ⁸⁾。ある批評家が述べているように、彼はむしろ短気で風変わりな人物として登場し、後に完全な自己犠牲の精神を持ち合わせるようになったのだ⁹⁾。

むしろ医者である Mr. Allan Woodcourtこそ真の慈善(愛)の心を持ち合わせている人物だ。彼の存在は極めて象徴的だ。敢えて言うならば、彼こそが救世主のような存在だ。時には偏在性を持っているのかもしれないと思わせるふしがある。彼はひどい病に苦しむ人々を助けるために中国に行ったり、インドに行ったりする。この小説の中で最下層階級の代表として登場する Jo や Jenny の前に出現したりする。Jenny の面倒を見ても当然請求しても良いはずのお金を取ろうともしない。Allan は Jo が生活出来るように General George に場所の提供を依頼する。Miss Flite の世話をしたがる人はいないが、彼はそれにも心を用いる。気は狂った状態でも彼女は親切を理解出来るだけの心は持っている。Richard の死の床にも Allan の姿がある。町の貧しい人々の中で Allan を知らない者はいないほどだ。しかし Sir Dedlock は彼を知らない。彼には Allan は必要ないからだ。Allan は真の慈善家なのだ。貧しい人々には真の隣人が必要なのである。そしてそこに Allan がいる。彼は肉体の病だけではなく心の病さえ癒す。前述のように小説の最後の場面で彼は Esther の心の奥深くにある自

分自身に対する見えない部分の目を開かせることにも成功する。

Mr. Jarndyce は Bleak House との関わりで Miss Summerson が慈善（愛）に関するあらゆるレッスンを見事に修得したことを確信する。Esther と Allan との結婚を認めたのもその結果だ。2人に慈善（愛）が完成した象徴としての New Bleak House を提供する決心をするのである。

《注》

- 1) 青木雄造。“解説”「筑摩世界文学大系 34 ディケンズ」p. 578
- 2) Charles Dickens, George Ford and Sylvere Monod, eds., *Bleak House*. (W. W. Norton & Company, Inc., Norton Critical Edition, 1977) 以下、示してある頁数は本書からの引用箇所である
- 3) Walt Whitman, “Boz and Democracy.” Michael Hollington, ed., *Charles Dickens Critical Assessments Vol. I* (Helm Information, 1995), p. 91
- 4) J. Hillis Miller, “Dickens’s Bleak House.” Steven Connor, ed., *Charles Dickens* (Longman, London and New York, 1996), p. 60
- 5) (2)に同じ。pp. 773-775
- 6) Bible：コリント人への第1の手紙，13章13節（下線部：筆者）
 - イ) Authorized Version: “And now abideth faith, hope, charity, these three; but the greatest of these is charity.”
 - ロ) The Living Bible: “There are three things that remain—faith, hope and love—and the greatest of these is love.”
 - ハ) 口語訳聖書：「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大なるものは、愛である」
- 7) Vladimir Nabokov, “Bleak House (1852-1853).” Michael Hollington, ed., *Charles Dickens Critical Assessments*, Vol. III, (Helm Information, 1995), p. 165
- 8) John R. Reed. “Freedom, Fate, and Future in *Bleak House*.” *CLIO: An Interdisciplinary Journal of Literature, History, and the Philosophy of History*, Vol. 8 (1979), pp. 175-194
- 9) Anonymous. “Charles Dickens.” Michael Hollington, ed., *Charles Dickens Critical Assessments*, Vol. I, (Helm Information 1995), pp. 152-153